

【翻訳】

愛はそれはそれは年をとった

——中国現代詩選（その三）何其芳『預言』

西何 檣 其芳 著  
偉 訳

Love is old enough: He Qi-fang's *Yuyan*

Qifang HE  
Isamu NISHIMAKI

要旨

This is a Japanese translation of a modern Chinese Poet He Qifang's collected poems *Yuyan* ('Prophecy') published in 1945 with a brief postscript by the translator.

キーワード：何其芳 預言 中国現代詩

コノテガシワの林／年のくれに人をおもう（一）／年のくれに人をおもう（二）／夢の後／病中／古城／夜景（一）／夜景（二）／ねむれぬ夜／かべ／扇／すなあらしの日  
巻の三（一九三六―一九三七）  
のべおくり／于猶烈先生／こえ／のもう／雲  
訳者あとがき

目次

巻の一（一九三二―一九三三）  
預言／あしどり／秋（一）／なげき／よるこび／すぎし日／雨の口／うすぎぬ／秋（二）／花輪／愛情／祝福／月あかりのもと／くれないをあらうなかれ／夏の夜／人におくる／ふたたびおくる／まどかな月の夜  
巻の二（一九三三―一九三五）

## 卷の一（一九三一—一九三三）

## 預言

心おどる日がついにやってきた

夜のためいきに似た、あなたのちかづく足おと

わたしにはよくきこえる。森の木の葉と夜かぜのささやきではなく

こけむす森の小径をはしるシフゾウのかるやかな足おとでもない

おしえておくれ、しろがねの鈴の歌ごえでおしえておくれ

あなたは預言のなかのわかき神なのか

きつとあなたはあのあたたかな南からきたのでしょ

あそこの月のあかりと日のひかりをおしえておくれ

どのように春風が花をさかせ

どのように柳のみどりに燕が恋をするのか、おしえておくれ

あなたの夢のような歌ごえにつつまれて、わたしは目をとじねむりたい

そのぬくもりをわたしはしっているようで、わすれてしまったような

気がする

まっっておくれ、つかれた足をやすめて

どうぞお入り、虎の皮をしいておすわり

秋がくるたびひろいあつめた落ち葉に火をつけ

わたしのひくい歌ごえをきいておくれ

その歌はほのおのようにおもぐるしく、たからかだ

ほのおのようにわたしの生涯をものがたる

むこうへいかないで！ むこうはどこまでもつづく森

老木のみきは獣のからだの模様をあらわし

なかは枯れているツタはからみあい

木の葉が空をおおいつくして、星はひとつもみえない

むなしくひびく一歩めのこだまを耳にするやいなや

あなたはおじけづいて、あげた二歩めの足をおろせない

いかなければならないのか、まっって、わたしもいつしよにいく

安心してあるける道を、わたしの足はすべてしっている

つかれをいやす歌をわたしはうたいつづけよう

そしてあなたに、あなたに手のぬくもりをあげる

ふかい夜のやみが、わたしたちをはなればなれにしても

あなたはわたしのまなざしから、目をそらすことはないだろう

しかし、わたしのところからの歌をあなたはきこうともしない

わたしのみぶるいにもたちどまろうとしない

このたそがれをよぎるそよ風のように

とおざかり、とおざかっていくあなたのほらかな足おと

ああ、あなたは預言のなかでいったように、なにもいわずにあらわれ

なにもいわずにさつていくのか、わかき神よ

一九三一年秋、北京にて

## 足音

あなたの足音はよくわたしのころのなかでひびくことがある

おもいにしずむわたしのころはうれしくも、かなしくゆれる

ひと住まぬ部屋にかかげられた琴のように、したしんだつまさをひ

さしくうしなっても

かぜがよぎるたそがれに、弦はなおすぎし日の声音にふるえる  
またひっそりした荒野にはこぼれたポプラのおちばの  
かわすためいきは、木々にありし日の葉音ににて  
ああ、それは江南の秋の夜

秋がふかまり夢もたけなわ

そしてすきとおり、ひどくもろく、あなたの遠慮がちなあしどりにた  
えない夜

あなたはどのようにまがりくねる欄干をたよりにこっそりのぼったの  
だろうか

どのようにかいるいあしどりではしってきたのだろうか、二階にはあか  
りがひとつ夜寒とともにあり

あどけないよろこびとともに一枚の原稿用紙をわたしてくれた  
つくったばかりの詞をみて、とあなたはさげんだ

あのはじめての夜わた

しが詩を書いていることをあなたはしった

一九三二年五月一日

## 秋（一）

病気だといわれても、わたしは否とって否定はしない

身もほそるおもい、恋をしている症状だという

しかし、ひらりとゆれるだれのスカートのすそに

もだえるわたしのこころがひねもすまといつてはなれないのだろう  
だれの流し目のくろいひとみが、牧人の笛のように

かいならされた羊のむれ、みじめなわたしのこころによびかけるのだ

ろう

ちがう、わたしがなつかしみ、夢見、思いをよせているのは秋なのだ  
九月の空はなんとたかく、なんとまるいのだろう

わたしのたましいはなんとかろやかにもちあがり、とんでゆく  
ためいきをつくわたしのまなざしのように、白露の空気をわたり

南方ではたかい木は、てのひらのようなもみじをおとし

馬のあしおとが奥山のしずけさをやぶり

すきとおったうれいがくねる溪流となつてながれ

すこしずつ心がときはなたれるようで、またふかみにしずみゆくよう

だ

春がすぎまた夏がやってくる。ひとしれずわたしはやつれ

つれづれにものおもい、なにもいわず、泣いたりもしない

六月二三日

## なげき

わたしはどれほどうしなつたのだろう。あさつゆのういういしさを

夜、みどりのこかげにしたたりおちる星空のしずけさを

春と夏のわらいさざめきを、花と葉のよろこびを

二十年まちわび、ようやく歌いだした青春のうたごえを

ふしあわせな愛にながすがい涙をすすり

したい夢がやってきて、ねむるわたしをつつむのをじつとまつ

そとからのよびかけが草のようにあおくのびて

かたくとざすわたしのとびらを指のようになたたいも

わたしはいまうしなわれた歳月をなつかしんでいる

かれぬえだにつほみのまましぼんだ花をいたむように  
 愛はくるしみのすえにあかい実をつけるけれど  
 それはもつともおちやすく、ひろいあげにくいのだ

六月二五日

## よろこび

おしえておくれ、よろこびはどんな色をしていますか  
 しろい鳩のはねの色ですか、それとも鸚鵡のあかいくちばしの色ですか  
 よろこびは音がしますか。葦ぶえの音ですか  
 それとも松風のざわめきにはじまり、さらさらながれる水の音になる  
 のですか

やさしい腕のように、しっかりとつかむことができますか  
 愛はひかるまなざしのように、みることができますか  
 こころをかすかにふるわせたり  
 またはかなしみとおなじように、しずかに涙をさそったりすることが  
 ありますか

よろこびはどのようにやってきますか。どこからやってきますか  
 蛍のようにおぼろな木陰をとんでいますか  
 薔薇の花びらからにおいたつかおりのようにひろがってきますか  
 やってくるとき、その足には鈴がなりますか

よろこびにたいして、わたしのところは盲人の目  
 でもとてもいとおしいでしょう、わたしのうれしいのように

六月二七日

## すぎし日

きいろいブッシュカンは屈伸する指から  
 ふるめかしくあわいかおりをはなつ  
 あかいカイドウはこけむすきはしのすみでさいており  
 おともなくしたたる秋のなみだのよう  
 金魚鉢の水をすいあげる築山のうえに  
 プール草が葉うらの紅をみせている  
 ちいさなにわのまえに茶褐色のちいさな丸椅子があり  
 すぎし日のわたしの手をのせていた  
 さびしい日々もするりと石の欄干のほとりから  
 すぐめがたむろする瓦屋根のあいだからかるやかにとおりすぎる  
 笑い声もためいきも、すこしもきこえない  
 風にむかつて開いている廊下の両扉  
 あの二階にのぼるよほよほの木の階段  
 声はねかえってくるあの高い壁  
 すべておもいだせ、しかも細部までかたることができ  
 わたしはあまりにも腕白でなかつた子どもで  
 お遊戯をするなかまたちの気持ちはわからなかった  
 あのふるほけさびれた部屋で  
 わたしはその草木のように、しずかにのび  
 ずかにもどり色づき、さびしさのなかで  
 しろい花をふたつ、みつつつけたことがあるかもしれ  
 ない  
 しかしそらとぶ鳥のよろこびのつばさはなかった

七月二一日

## 雨の日

北国なのに南国の気候になってしまった  
今年の夏は雨がよくふる

わたしのこころの空模様もおなじようで  
あたたかな日はなく、はれた日はない

さびしさになくわたしの涙にはじめて気づいて

すぐぬくもりのある手でふいてくれたのはだれだろう  
十九歳のわたしのほこりかなこころをさらっていき  
またすぐおしげもなくすてさったのはだれだろう

ああ、わたしがなみだであなたの手をぬらしたことのある人よ  
愛は木の葉のように

きづかないうちに新緑がもえ、たえしのぶうちにつぼみがふくらみ  
わすれさられてあかいはなびらをひらかせる

あかいはなびらはうれたかぐわしさをふるわせていたことがある  
それはわたしのひるとよるのこがれるおもい  
あめがちな夏にふりそそがれる  
あまりにとりとめのないおもいに、すこしばかりのしめりけをくわえ  
て

## うすぎぬ

わたしは夏のあいだあなたをよそおっていたうすぎぬ

いまはしなやかにおりたたまれ、かすかなうれいをたたえて  
もすそはあなたがあそぶとき權でかきおこした蓮の香をとどめ  
袖にはあなたのうれしなみだ、ねむりほうけるときのつばき  
さらに月あかりのもとでゼニアオイのかけは  
あなたがめをつぶるときにこつそりむねにうつったもの  
眉マユ、秋のひざしがおへやにさしこみぽかぽかとあたたかい日に  
あなたは衣装たんすをあけ、しばらく着ない服を整理しないでしよ  
か

わたしはあなたのこえをもう一度ききたい。もう一度  
「そろそろまたあたたかくなるわね」といつてほしい  
するともうじきやってくるのは雪とこおりの冬ということをきつとわ  
すれる

あなたのあまい声がうそだと、けっしてうたがうまい

九月十五日

## 秋(二)

朝はたつぷりはおつていた露をふるいおとして  
谷奥からカンカンときこるおとがながれてくる  
稲の香をあくほどたべた鎌を置いて  
竹垣にみのった瓜を背籠にいれる  
秋は農家にすんでいる

川面のひえた霧にまろやかな網をなげ  
くろいトガリヒラウオに似たナンキンハゼの葉のかけをひきあげる  
とまはしろい霜におおわれ  
もどり舟のちいさな權をかるくこぐ

秋は漁船のうえでたわむれている

こおろぎがないて草原はいよいよひろく

水枯れ溪流はさらにすきとおる

牛の背の笛の音はどこへきえたるう

あの夏の夜のおいと熱気があふれていた笛は？

秋は羊飼いの女の目のなかでまどろんでいる

九月一九日朝

## 愛情

朝のひかりはつゆおくザクロの花のうえにさきほころぶ

まひるのひかげはのろろとしたあしどり

ヤナギとボダイジュのあいだをたわむれる

みなみのかげが睡蓮のみずうみから

夜をつれてきたとき、野には

むせるにおいがいよいよあふれる

ナツヅタはのびてからみあい地面をおおい

ネナシカヅラはくさのねよりこずえまでまといつく

みなみの愛はぐつすりねむっており

めざめに羽ばたく音さえねむけをさそう

雲のない秋ぞらをハヤブサはとんでゆく

狩人の馬は荒れ野をかけめぐる

夕日は古城のあなたにせずむ

かぜと月あかりは裸木をなで

忍耐がこりかたまつたラクダの鈴の音は

みずもくさもないはるかな道にのこされ

おおきなしろい流れ星がつめたいなみだのしずくのように

とおい夜のほうへ流れていく

北の愛はおどろいて目をさましていて

かるやかで残酷な足をもっている

愛はそれはそれは年をとった。しかし、初心はわすれない

愛は伝説の王子がかぶる黄金のかんむり

九月一九日夜

## 花輪

あるちいさな墓に

ふかいやまにさきちる花はもつともかぐわしい

ひとにわすれられたあさつゆはもつともかがやいている

きみはしあわせだとおもう。玲玲よ

かげをうつしたことのない小川はもつともきよらかだ

みどりのつるはきみのまどべよりのびてきて

金色のちいさな花が髪の毛におちてくる夢を、きみはみた

のきをつたう雨のものがたりにむねをうたれて

きみはさびしさを、さびしい星あかりを愛した

きみには少女の真珠のなみだがあり

なまえのないかなしみをいつもながしている

きみにはせつないほどつくつくしい日々があり

きみにはそれ以上にうつくしい天折がある



愛は田野のおとめの藍ぞめののらぎ

しかしあなたは、あなたが愛を手にしたなら

そのつめたさになくことになる

おちばと枯れえだをもやそう

ほのおのちかくへ、はぜおとをききながら一緒にすわろう

森をめざめさせ、かすかに身をふるわせながら

わたしたちの愛のかたらいをぬすみぎきさせよう

九月一三日

## 祝福

あおい夜は花のかげにひとりの琴のごとくにたゆたう

かくわしさはそこよりひろがるうたごえ

わたしのおもいはいま

うすくてかるいいつつのちいさなあかい羽をはばたいている

花の香にあみとられはしない

三日月は金の輪の半円。ほのかなひかりでも

みちはよくみえる

あなたのゆめのほとりとんで、とまり

みまもる。あなたの眉はひくくたれ、くちびるは笑みをかすかにうか

べ

そしてわずかにうごかし、口づけばかりねだるわたしにおこっている

かのよう

よあけのあなたの目に虹いろのゆめがぐだけて

きらりとひかるなみだとなるとき

かれはずしりしたつかれと満足をのせ

わたしのこころにとんでかえる

わたしのこころはぱつちり目をみひらき

あなたにその日のさいしよの祝福をささげる

一一月二日

## 月あかりのもとで

今宵のゆめはきつと銀色

しろいハトが水あびの羽をひろげるように

水にうつるしろいハスのかげからこぼれるはなびらのように

るり色のアオギリの葉から

霜がつもる瓦にながれついた秋のこえのようだ

だけれど、<sup>メイライ</sup>眉眉よ、あなたのところにもこの銀色の月の波があるのか

い

あっても、きつと魂がすいこまれるような氷となっているのだから

ゆめはおいかぜをゆく船だとしても

いてつく夜のなかへこいでいけるのだろうか

一〇月一日

## くれないをあらうなかれ

さびしいきぬたの音がさむざむとした堤にみち

すみわたる古き波はうたれるごとくかろやかにふるえる

わたしのけだるい腕がたれさがらうとする

この金碧からなにをひろいあげられるのだろうか

春のあしあと、よろこびのかけ

うすぎぬのいろあせるあいだにすがたをくらす

ひかりとあまかせにしきりにあらわれ  
うすくれないいろのゆめもいろあせるのではないか

わがきぬたをうつうち、ひんやりした秋のひかりがやってきた

そのあしはこおりのようなみずにつかり

石橋のうえのしろい霜をふみつける

わたしのかげはてらされ、みぶるいする

一〇月二六日

## 夏の夜

六月、エンジュの花のそよかせのなか洗ったばかり

あなたの髪のはなめらかですずしいほのかなかくわしさをしたたらす

まんまるい木蔭をわたしたちの空としよう

あなたのうつくしい目には明星のえみがたたえられている

蓮のはなはずかにみどり葉のゆめのあいだでねむり

かすかにかおるその息は蛍の金の翅

みずうみのほとりととび、しかとはみえない草のあいだをとんで

あなたのスカートにかかるくおわれたひざにとまる

なやかなあなたのうではつかまりからむ葡萄づるのようで

あかくうれたささやきとともに、わたしのくびにまきつく

わたしのむねのふるえがきこえる、とあなたはいう

それは木の根があつい夏の夜に身をふるわせ土をうごかす感じだろう

か

そう、わたしの心にあたらしい不思議な樹がいつぼん根をおろし  
じきにわたしのくちびるにあかい花をつける

一一月一日

## 人におくる

あなたの青春のこえにわたしはかなしくなる

わたしはねたまずにはいられない。それがたのしそうにながれるみず

のよう

あさいみずくさのあいだでねむり

また星ぼしのしろがねのこえのよう

秋をゆめみるみずうみのまんなかにおちていく

あなたのなめらかなまるいくちからうまれることが、もっとねたまし

い

ゆめのなかの花に

またはきもののすそに恋をしてもむだだ

のぞみなき恋はやさしい

もっとやさしいものおもいに、わたしはとらわれている

あなたが真珠のこえをのこして

わたしのゆううつなところをめぐめさせてから

一一月二二日

## ふたたびおくる

あなたのはだけた両腕をみて

あなたのをまれ故郷の海をおもう



あなたのあさぐろいほどと

くろいかみの毛、くろいひとみをひたしたところのある海を

花のようにあなたはのびやかに咲いている

みなみのおとめよ、あなたをおもうとわたしはせつなくなる

あなたのほこり、あなたの青春がわたしにはせつないのだ

あなたのかわりにわたしは流謫の日々をおくっている

このさむい地方をとびまわる

あなたはうれいをしらないつばめ

わたしのゆめのなかへとんできてくれるかい

わたしのゆめのなかもきいろい土ほこりにみちている

## まどかな月の夜

まどかな月は銀色のしずけさをふりまいて

つめたい水のようにあおい草の根をひたす

睡蓮はゆめのなかからそのおとめごころをひろげ

はじらうはなのさきはくちづけされたようにあからむ

夏の夜、まだら蚊はねむらない

その翅はなびらの蜜にまみれた黄蜂の足

わたしたちのささやきをさらって葦の原につげにいく

はなしておくれ、どのようなかなしみとさむさが

あなたのところをゆさぶり、月のあかりになでられた木の葉がふるえ

るように

あなたのひとみからきよらな真珠、かなしみのつゆをゆすりおとした

のだらうか

「そう、わたしがいたのは、今夜があまりにもうつくしいからなの」

あなたのこえは天使のまっしろな腕のようにやさしく

時にふれれば、あらゆる瞬間が金となる

わたしが残酷な恋人だとおもうかい

もしもわたしのむねがあおい海のようにおだやかならば

わたしの血脈をまくらに海藻のにおいがするあなたの頭をのせてね

その鼓動は魚の口からはきだされる珠の泡のよう

銀の輪がこもり歌となつてめぐりただよう

魅惑的なゆめはもうあなたの眉のさきにやどり

あなたの目はいまにさきそうなふたつ帯の二月蘭

ひそやかな夜の香麝こうじゃをひそめている

金色の星が森にきえたのはきこえるかい

黄色くうれたエンジュの花が枝をはなれたのだ

こかげがあなたの髪の毛のはえぎわにあたるのがわかるかい

それはうっそうとした木の葉からもれてくるそよかせ

欄干の澄んだ陰がもうわたしたちのあしものにのびてきている

ものいわぬあなたの赤い唇はいかなる答えをまわっているのだらうか

花がおちるようになしかな口づけだらうか

一九三三年春

## 巻の二（一九三三—一九三五）

## コノテガシワの林

ひざしはヒマのおおきな葉のうえにある  
 七里峰は土地神のほこらに巣をつくっている  
 影と競走するこのわたしは  
 巨大な輪をおいかけ、かえってきて  
 はじめて時がとまったことをしる

しかしあおい草はらで  
 こおろぎの鳴き声をおう、ちいさな手はどこへいったのだろうか  
 こどものころのなかまの歓声はどこへいったのだろうか  
 こずえより青空をまっすくのぼっていったのだろうか  
 少年時代のこの広大な王国は  
 異郷の埃によごれたわたしのあしもとで  
 かなしいほどにちぢまっていく

砂漠をいくひとはわずかな水をも大切に  
 船をあやつるものは權のとどかない波をうらむ  
 記憶のいちばんほのぐらい片隅にしまっておく  
 おかされない天地がある、とわたしはおもっていたものだ  
 それより大人のつまらなさを感じ  
 いよいよ夢路のおぼつかなきを愛する

一九三三年秋

## 年のくれに人をおもう（二）

ろばのいななきはきだしては  
 またなみだとともにのみこむ  
 ふるぼけた木の扉のようにむせびなく  
 わたしの窓のしたで  
 おい、おとなしい家畜よ  
 どこできみのねむりをなくしたのか

鳩酒ちんしゅをあおいで自害するものは空になった杯をほうりなげ  
 ここちよさはするどいおとをたて、こころにきざまれる  
 それから自分の残酷をなく  
 やさしい涙がつかれば  
 さいごはおだやかなねむりとなるだろう  
 自縄自縛によって、わたしはくるしみ  
 しかしうしなうものがあまりにおおく  
 一途なおもいもすくなくなつた

地図のうえで  
 あなたのすむちいさな町をさがしたことがある  
 そこにはあおい石畳のとおりがあり  
 ひくい土壁に瓦屋根  
 町をかこむ城壁はむかしのままで  
 あなたはよくとおるこえで  
 のびやかに人と談笑し  
 いっぽうではたえず斧をふるって

みずからの理想を彫琢する……

老衰したひかりはじよじよに暖かさをうしない  
北の夜はいよいよくらく、ながくなるばかり

一二月三日

## 年のくれに人をおもう (二)

枯れた黄色い松かさがおち

ひくくとぶ鳥は羽音をたてるとき

あなたは林間での散策をきりあげる

水がひえて魚がかくれるとき

川辺にはあなたのさびしい釣り糸がただよう

冬のさざりがあなたの窓をすっかりつつんでしまふとき――

ひさしく病にこもり

北国の旧居がまだ気にかかるか

かべのかけに

へやのすみのふるい籐椅子に

どれだけのなやみをかくしただろうか

そのころわたしはいつもなやんでいた

あなたはいつもやさしくだまっていた

窓にかかるふるほけさむざむとした布のあいだに

灰色のあしをひくつかすやもりがよくみかけられた

そとが中庭だ

キツツキのこえはさびしくふるえて

エンジュの枝葉をもれてくる、もれてくる

あのこえがすきかとあなたはきく――  
いまなら、きつとすきだというだろう

西風のなかで毛がはえかわったラクダのむれが

あしをあげ

またかるくおろす

通りには霜がうつつすらおりている

一二月七日

## 夢の後

みしらぬ手がおずおずと

きいろい花束を机においていった

いちばん枯れやすい花だ

金色のあしあとをのこして

みしらぬ恋がおずおずとおとずれ

そしてさつていった

昨晚、竹の葉が窓にみち

手をたずさえ寒風のなかをかえり

家族と談笑していると

炬の火はあなたのはじらいをあかくてらした（あなたのそのしあわせ

なはじらいは

わたしの夢のうすやみを明るくした）

南にさるひとをなにげなくみおくり

車がでてから月はしろく空がたかかった

今宵わたしは自分自身をみおくつたようだ  
すなあらしのこの国で  
ひとつのさびしいおもいでのためだろうか  
はじめてみずからのあしあとのいとおしさをしる

一九三四年二月二日

## 病中

いま、みずうみはきつと  
くろい波がのたうち  
風は灰色の瓦屋根  
黄色の瓦屋根をかすめて  
大通りではすなほこりが  
車のようにふきめぐり  
はるかとおく郊外に  
らばがひく車は立ち往生しているが  
まわりに人家はみあたらない……

四方の壁がわたしを孤独にする  
きょう、わたしの壁はいよいよ厚く  
風が層をなし、砂も層をなす

「今夜北風は濤声をおもわせ  
わたしたちの小部屋を  
船のようにゆらす。さびしきみちづれよ  
このはるかなみちのりに嫌気がさしたのか  
わたしたちは熱帯をめざすのだ

そこでわたしたちは植物になる  
あなたはナツツタ  
わたしは菩提樹の太木」

日がくれる。わたしはそつと  
あかりをつける。本をひらいて  
宝手箱のおもいでを、ひらく

## 古城

三月一三日

異国からかえってきた旅人は  
長城ははしる馬のむれ  
首をのばしていなく隣間石と化したようだという  
（魔法にかけたのはだれだろう、のろつたのはだれだろう）  
馬のあしもとの枯草は、毎年新芽をだす  
いにしえの单于せんうの魂がねむるのは異国の砂のした  
辺境をまもる白骨も、もううらみはしない……

とはいえ長城がおしとどめることのできない  
異国の砂塵は西からふく砂漠あらしとともに  
このふるき都にやってくる  
みずうみをこおらせ、じゅもくをはだかにし  
さすらう人のこころをもさむくする

深夜はしろい石橋をわたり  
太液の池のほとりに立つしろい石碑をなでる

それより人にあえば人字柳の碑は

いったいどこにあるかとさく。こたえる人はいない

かなしいかなこれがふるさとなら、ついにたちさろうとするが

おもいとどめて、おもいえがくのは高殿がめのまえにたちあらわれ

あやうき欄干にもたれて……

地におちる

きいろいエンジュの花、かなしき涙

つかのまの旅寝のまくらの

ほのぐらくみじかい夢に

わたしは人生の哀歎をなめつくした

とおくでゆめのとびらはとざされるのがきこえ

ながいそこびえの夜がのこされ、地殻にこびりつく

地殻はとづくに死後硬直し

かすかにふるえる動脈数本と

ときおり、振動するはるかかなたのレールをのこすのみ

にげよう、もつとさびれた街ににげよう

たそがれにすたれた城壁からとおくをのぞめば

この北国の天地にいつそうとざされる

平原にかみなりがとどろいたという

泰山は、つづらおりの山道を雲のあいだにまきつけ

絶望のポーズ、絶望のさけびのようでもある

(のろつたのはだれだろうか、魔法にかけたのはだれだろうか)

夕陽にてらされ黄河をゆく帆船はみえず

海の三神山もみえない……

かなしいかな世界はこんなにもせまく、また

この古き都ににげかえる。風はみずうみのこおりをとかす

ながい夏の日のコノテガシワの老木のもと

今年もテーブルを囲いお茶をのむひとがいる

四月二四日

## 夜景（一）

市のさわぎはおさまった

潮がひいて砂浜があらわれるように

灰色のやねのしたには

やすらいでいるたましいがある

さいごの古馬車がとおりすぎた

宮門のそこには労働者が

つめたいおおきな石の板をまくらにねている

夜中におきて仲間をけおこして

なきごえがきこえるという

とおざかっていったかとおもえば、またちかづいてくる

かたくとざされた人すまぬ宮殿のなかに

カラスのむれがねぐらにする城やぐらの屋根に

するとさらにふしぎなこたえがかえってきた

あるゆうべ

石の獅子がなみだをながしていたという

やわらかなためいきとともにとおざかる

夜風は城壁のうえのかれくさをゆらす

## 夜景（二）

下弦の夜の藍色のもやのなか

（もしあなたがこの街をしらぬ旅人でなければ  
とおりでひとまちがいをするにちがいない）

馬のあしおとはたえだえにさびしくひびく

色のはげ落ちた朱門のまえ

半円形のきいろいあかりのもと

よぼくれた手のみずから馬車のとびらをあげ

くろいかげをひとつおろす

玄關のノッカーをさぐりあて

よぼくれたノックの音が二度

（かれはこのいえのどら息子で

人生の大半をむだにすごして

あげくのはてにおちぶれたわが家にまいもどったのだろうか

それとも老いさをたくすあてもなく

とおくの身寄りをたよってやってきたのだろうか

ノックの音はさらに二度

しずまりかえる門のうちがわにといたです

（よるべなきかれの運命はどうなるだろうか）

色のはげ落ちた朱門はなかばひらいて

そのくろいかげをいれてはまたとじた

（あなたを世界のそとにしめだした）

馬のあしおとはさびしくとおざかる

（だからたそがれどきになると

鳥はとびたつのだ

まつくらともなれば

林でねぐらをまちがえてしまうだろうか）

## ねむれぬ夜

はるかなゆめからかえってきたひとがいる

ゆめにみるのも砂漠というひとがいる

さまようばかり

パン、パン

拍子木は大股にあるいて

路地のおくで犬にほえられ

またひとりで啞おろしていく

さいごは夜行列車のおまえが

ながいためいきをつく番だ

おまえはあんなに無鉄砲でふるえている

あたかも林の葉がつめた露にふるえるときに

病気の子は母親の腕のなかで

眠い目をこすりなきだした

白髪頭のうわごと

となりのいびきは目をさまささない

列車よ、おまえはさまざまなゆめをのせている

途中いくらかひろいあげては

四月一六日



またみちみちすていく

## かべ

ぎしぎしと水車のうたは

あさのとおいみちのりをくりひろげる

灰色のかべはながい路地をさらにながくし

あしをとめ、わたしはかるくためいきをつくだろう

ごらん、ふじづるはかべにぶらさがり

あおあおとしている。だれがわすれていったひもだろうか

かべのうちの芝生にわたしはおもいはせる

まひるにすらりとしたこかげがかけのぼっていく……

ぼうとしてわたしはかたつむりとなって

レンガのすきまをはい、道にまよい

わずかな葉陰とつゆのすずしさに

わたしはねむりにおち、ながい朝のゆめをみる

めがさめてかるやかにみをおどらせ

ばかり、からだはやはりかべのそと

一九三四年八月一五日

## 扇

もしおとめの化粧台に鏡はなく

日がな一日壁にかかる団扇をながめていたら

団扇のうへの襟巻は水にうつるかげのようで

おしろいやなみだを雲やかすみにそめ

花の歳月の絵絹をながれすぎるのをなげく

道にまよう桃源をたずねあてるすべはなく

さむい月のなかに生き物がいるように

毎晩このリングのかたちした地球をながめて

想像するのは、その山や谷のこきうすきかげに

すむのはいかなるしあわせな……

一〇月二一日

## すなあらしの日

正午。あらゆる川船が白帆をはりだすと

わたしはまどのそとのすだれをおろす

太陽は思考をきらうのだ

すだれをおろせば

わたしは無入島のほらあなのなか

しかし、わたしはいつたい海におわれたミラノ公爵(注)なのか

それともかれの親なし娘のミランダ(注)なのか

ミランダよ、自分の名をよんでも返事はない

狂風がとつぜん怒涛のようにおしよせ

雲ひとつない空が黄砂におおわれる

これはわたし自身の魔法なのか

数十年来未曾有の強風が

水辺の老木をふきとばして龍となり

かべを、石をふきとばして

ろばのあたまをこえてしずかになった

わたしはちようどながいひるねをしようとしていた

おきたら仙人の島に着陸し

秀才も水におちるのかと手をたたいてわらわれるつもりだった<sup>(注2)</sup>

だけれど、あなた自身のねごとをきこう

……Maidens call it love—in idleness.<sup>(注3)</sup>

その花のつゆをわたしのまぶたにしたたらさないで

めをさましてわたしがみるのは

もしかして一匹の狼、一頭の熊、一匹の猿……

……喉がかわいたかい。水をのむかい、それともオレンジがほしいの  
はなしているうちに、ねがえりをうち、手をのばすと

ベッドまえの籐のテーブルのうえのヤブランを鉢と皿もろともおとし  
てしまった

わたしのゆめをうちくだいてしまった

わたしは白髪の狂人となって

髪をふりみだして、壺をさげ、白波にみなげするつもりだったのに<sup>(注4)</sup>

すだれをまきあげ

たしかめよう。もう黄昏どきか

それとも午後の黄砂がこのバビロンをうめつくしてしまったのか

### 原注

- ①ミラノ公爵とミランダは、シェークスピアの劇『あらし』の登場人物。
- ②蒲松齡『聊齋志異』の「仙人島」をふまえる。
- ③シェークスピア『真夏の夜の夢』にみえる。

④『古今注』所収「筥篋引」による。

### 巻の三（一九三六—一九三七）

### のべおくり

しずけさのなかもえる白ろうそくは

わたしのむねからしほりだされるためいき

いまはのべおくりの時代だ

気性のあらいバイロン男爵の

ひややかなこえがきこえる。「お金だ

つめたいお金だ。しかしそれで快樂が手にはいるのだ」

ネルヴァルが美しい絹の紐で

海の秘密をせるイセエビをひいて通りをあるいている

またおんなのエプロンの紐で

一泊一ペニーの宿のまえで首をくくる

さいごの田園詩人はいまホテルで

首のあおい静脈にナイフをあてている

もう二度と恋をうたうまい

夏の蝉が太陽をうたうように

形容詞と隠喩と造花は

ストロブのなかで炎となって消える

おともなく書物のページをくう蚕は  
怠惰のなかに繭をつくる  
いまは冬だ

のべおくりのながい行列で  
わたしはみずからをほうむる

神話のなかのうわばみの歯をたねまいて  
それらが戦士となってうまれそだち  
たがいにせめころしあい  
さいごに最強のものがのこるまで

一九三六年十一月八日、萊陽にて

## 于猶烈先生

于猶烈先生はふしぎな人だ

ある午後かれは農場でひとり

帽子をとってチューリップのうえに腰をかがめていた

太陽はちょうどあの黄色、白、赤の花をてらしていた

「植物はね」とかれはいう「うつくしい生活をしているのさ

背のひくいこの花は色とかおりで

蜂や蝶をよびよせ子孫をふやす

ところがあの川辺にあるおおきな柳の木は個体をふやすのに

風や鳥、水のちからをかりなければならぬ

植物の生殖は自然で愉快だ

くるしみはなく、恋愛もない」

かれはゆつくりオジギソウの鉢植えにちかづき

指さきでその羽のかたちの葉にふれると

あれらのあおい目はつきつきととじられ  
枝がねむたげなおつむのようにねむりにおちていく  
于猶烈先生はふしぎな人だ

十一月一日

## こゑ

魚には声はない。こおろぎは翅をならす  
人類の祖先は直立歩行ののち  
さげびとうたで

のどにつまるかなしみとよろこびを

はきだすことができたのはさいわいにちがいない

あかいほのおがかれらをあたたくするように

さむい夜、森でうたげをもよおすとき

手はなお獣の血にそまり

または石斧、石剣をにぎりしめている

しかし、たくみな弓矢をつくり

鹿を一頭しとめてから

ふりむいて兄弟の額をねらったのはだれだろう

するとビル十階の高さの巨砲がつくられ

空の平和をおびやかす

ごうごうなる鉄の翅からまかれた火は

あらゆる都市の骨格——鋼鉄とコンクリートを破壊する

不幸にも人間がつくりだす死をまえに

人類はこえをうしなう

魚のように

黒い網のなかで

戦死者のながい名簿がつぎつぎとおくられてくるとき

死を猶予されたものはいつものようにさわがずに食糧恐慌のなか

わずかなじゃがいもやたまごをさがしもとめる

いっぽうで、あの気のふれた数人のギャンブラーもおちつきはらって

よくふとった白い指で

人類の運命をさいごの元手にして

勝ち目のまったくない賭けをしようとしている

## のもう

うわついでうたっている人たちへ

のもう、のもう

ほんもののよっぱらいはしあわせだ

天国はかれらのものだから

もしアルコールと書物と

蜜がしたたる唇の

いずれも人間の辛苦をおおいつくせないのなら

もし泥酔からなれば醒め

そしてついにすっかり醒めてしまうなら

それでも帽子をはすかいかぶり

うすめをあけて

ほろよいの人生を演じるのか

木枯らしにおののく蠅は

紙の障子にとんできて

死体をゆめみ

まなつの西瓜の皮をゆめみ

ゆめのない空虚をゆめみる

わたしはわたしがあざける語尾に

みずから恥ずべきをきく

「あなたもぶんぶん

とぶ蠅にすぎないさ」

もしわたしが蠅ならば

はりがねの手が

頭上にふりかかってくる音をききたい

## 雲

「わたしは雲がすき、ながれる雲が……」

自分こそボードレールの散文詩のなかの

あのものうげに首をかしげ

空のかなたをながめる異邦人だとおもっていた

わたしは田舎にいった

お百姓は人がいいので土地をうしない

かれらの家は一束の農具となっていた

ひるまかれらは田野へ日雇いにでて

よるはかわいい石橋を寢床にする

わたしは海辺のまちにいった

冬のアスファルトのとおり

別荘はたちならんでいる

おどおりにたちならぶ売笑婦のようだ

夏のわらいさざめきと

金満家の破廉恥をまつている

これからわたしははずばず意見をいわなければならない

わたしはかやぶきのやねがほしい

雲を愛さず、月をあいさず

星も愛さない

一九三七年春

### 訳者あとがき

何其芳 (He Qifang 一九一二—一九七七) は中国現代詩史において、  
 確固たる地位をあたえられている。卞之琳、李広田との共著詩集『漢  
 園集』(一九三六年)により、漢園三詩人のひとりと称され、日中戦  
 争勃発後は延安に移り、中共の詩人、文芸理論家としても活躍した。  
 二〇〇〇年に全八巻の全集が刊行されている(『何其芳全集』河北人  
 民出版社)。何其芳の詩は、初期の「個の声」より、一九三八年以降  
 「時代の叫び」に方向転換していったとされ、今日高く評価されるの  
 は初期の作品群である。

ここで和訳をこころみ、詩集『預言』(上海文化生活出版社、一  
 九四五年二月初版、一九四六年十一月再版、後に新文芸出版社、一九

五七年九月三版、上海文芸出版社、一九八二年十二月四版)はほぼす  
 べて「個の声」といえる作品からなる。代表作「預言」を表題に掲げ  
 たこの詩集は一九三一年から一九三七年までの作品をおさめ、一九四  
 五年上海文化生活出版社より「文季叢書」第一九巻として上梓された。  
 一九五七年の新文芸出版社版は未見だが、一九八二年の上海文芸出版  
 社版では作品の排列が少し改められ、字句の改訂なども若干見られる。  
 拙訳ではこの版を底本とした。初版と比べて、改訂は作品の表現をそ  
 こねるものでなく、むしろより洗練させたようにおもわれたからだ。  
 ただし、同版で削除された「牆(かべ)」を、『何其芳文集』(第一巻、  
 人民文学出版社、一九八二年)のテキストにしたがい、一九四五年版  
 の排列にならって、巻の二の「扇」の前に置いた。

詩人の生涯と文学について、先行研究によりもうすこし詳しく紹介  
 しておこう。

何其芳は四川省万県河口郷三正里六甲割草壩の地主の家に生まれた。  
 本名は何永芳、ペンネーム「其芳」は中学時代の国語教師がつけたも  
 のという。一九二九年、中学を卒業し、父親の反対を押し切り、上海  
 の中国公学予科に入学する。この時期彼は、詩人聞一多、徐志摩、戴  
 望舒の作品を耽読し、『新月』などの雑誌に詩文を発表し、「新月派」  
 の影響をうける。

一九三〇年夏に、北京大学と清華大学の入試に合格し、清華大学外  
 国文学部に入学。しかし、数ヵ月後に高等学校未卒業のため除籍され  
 る。翌年秋、交渉の末北京大学哲学部に入学を許可され、一九三五年  
 に卒業。在学中、北京図書館に通い、読めるかぎりの外国文学の翻訳  
 を読み尽くしたという。ツルゲーネフ、ドストエフスキー、トルスト  
 イ、チェーホフ、ユーゴー、フローベール、モーパッサン、シエーク  
 スピア、エリオット、テニソン、ロセッティ、イプセン、ハウプトマ  
 ンなどの作品に熱中した。そのほか、英文でシェリー、キーツの詩を



読み、『全唐詩』『宋六十家詞』など古典文学もその読書歴にくわえられた。

詩集『預言』収録の作品の多くは、北京大学在学中に書かれたものである。日中戦がはじまる前のこの時期に、中国古典文学を背景にしなから、西洋文学を貪欲に吸収して、同時代文学に刺激され、何其芳の詩が生まれたのだとみてよいだろう。詩人がなにを読んだか、その読書歴は興味深いものがある。

大学を卒業してから、何其芳は天津、山東省萊陽、郷里の四川省など各地で中等教育に従事するが、一九三八年八月に延安にうつる。ここで、中共の文化人となったことは彼の人生と文学にとって、分水嶺となったことはいまでもない。魯迅芸術文学院で教鞭をとり、一九四四年以降は中共代表団の一員として、重慶におもむき、文化教育関連の仕事を担当し、『新華日報』副社長をつとめた。人民共和国成立後、文芸理論や中国古典文学研究に没頭し、北京大学文学研究所長、中国社会科学院文学研究所長などを任じた。文革中は迫害され、農村にやらされ、一九七一年に病氣のために北京にもどることができた。晩年はドイツ語を学び、ハイネ、ゲーテの詩を耽読したという。一九七七年七月二四日、胃がんにより永眠。

中国現代詩研究者の謝冕は何其芳の詩を、「華麗ではあるが彫琢を重んじず、清新の中に蘊蓄を現し、情緒の微妙な変幻を捉え、鮮やかで華麗な形象でそれを描くのが巧みであり、「詩風は色濃く艶やかで、晩唐詩の優美な風情がある。彼は現代人の微細な感性と伝統的なイメージの美を結びつけ、きわめて精密な現代芸術を作り出した」などと評する<sup>(註2)</sup>。同氏はつづけて、これらの特色がよくあらわれる作品として、『預言』所収の「夏の夜」を挙げている。

また、『中国詩歌通史 現代卷』(二〇一二年)において、伍明春は何其芳の初期作品について、「青春期の感傷、ゆううつを避けること

なく、そうした情緒を丁寧に汲みあげ、かるやかで脱俗非凡な効果をもたらししている」と、詩の内容と表現効果をとらえる<sup>(註3)</sup>。これらの特色は、それぞれ『預言』に見出しえよう。そのほかにも、涉獵すべき『預言』についての先行研究は多々ある。

詩人何其芳について、日本での研究・紹介もすくなくない。『預言』の全訳は秋吉久紀夫によってなされており、同氏編訳の『何其芳詩集』(土曜美術社、一九九一年)におさめられている。そのほかに『夜の歌』『何其芳詩稿』や、編訳者の論稿、詩人の年譜もふくまれる同書により、詩人としての何其芳を概観することができる。拙訳は推敲の段階で同氏の翻訳を参照させていただいた。

さらに、宇田禮の評伝『声のないところは寂寞 詩人・何其芳の一生』(みすず書房、一九九四年)はフィクショナルな人物も登場するが、同書により詩人が生きた時代を知ることができる。そのほかに、代表作「預言」などにかんする作品論もかなりあり、日本で詩人何其芳への関心は高いといえる。

『預言』所収の作品は、筆者が何其芳に対してもっていた「イデオロギーの詩人」というやや陳腐なイメージを完全にくつがえし、表現が新鮮かつ清冽である。そのよさをつたえようと心がけたものの、音韻のよさなど翻訳できないものが多々あり、新たな詩語と表現が生み出された原作をぜひ紐解いていただきたい。

## 注

(1) 『中国詩歌通史 現代卷』(人民文学出版社、二〇一二年六月) 第七章第三節「卞之琳、何其芳的創作」を参照、伍明春執筆。

(2) 謝冕著、岩佐昌暲編訳『中国現代詩の歩み』中国書店、二〇一二年三月、八七頁。

(3) 前掲『中国詩歌通史 現代卷』四一二頁。